

## 歎異抄講話 第七章 無碍の一道

### 第一節 無碍の一言

「一。念仏者は無碍の一道なり。」

### 第二節 無碍の謂いわれ

「そのいはれいかんとならば、信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。罪惡も業報を感ずることあたはず 諸善もおよぶことなきゆゑなりと云々。」

### 第一節 無碍の一道

「念仏者は無碍の一道なり。」

### 信一元の生活

引続いて頂いてきましたように、聖人は信一元の生活の主張者であります。慈悲の問題も帰するところ念仏一つ、師弟道も念仏一つ、仏智廻向の大信心はそのまま人間生活の根底に、無我報謝の生活を成就して、人生万端行くとして可ならざるはなく、念仏一つによつて統融せられたる美しき生活を成就することであります。ここには、慈悲と、孝道と、師道との三つの世界について述べられました。この三つはこれにとどまるのではなくて、一切の世界を代表せしめられたのであります。この三つに限らず念仏は一切の世界の行詰りを解決するのであります。一切の問題は念仏一つによつて解決する、これはまことに事実であります。われらはこのことを同朋の生活の上に拝んで、己が体験の上に知らせていただくことでもあります。

聖人は他力本願の宗教を指して「獲得金剛真心也」(金剛の真心を獲得するなり)と仰せられました。信樂とはまごころの獲得であります。まごころは一切に通じ一切を生かす力を持っています。信はまごころに力であります。金剛の力であります。自分で作ったものは自分で壊れもしよう。春の訪れによつて、もえ出でた若葉を如何にもすることができないように、この金剛の真心は「本願力廻向の大信心海なるが故に、破壊すべからず、之を金剛の如しと喩ふるなり」と仰せられました。この金剛の真心こそ、一切を生かす力であります。しかしてこの金剛の真心を獲得すること以外に宗教はないのであります。

### 無碍の一道

相対の世界を生かすものは、絶対の力であります。絶対の力、すなわち如来の本願力であります。この如来絶対の本願力は、行者の上に、無碍の一道を展開するのであ

ります。このゆえに、前三章の帰結として、第七章には、「念仏者は無碍の一道なり。」と仰せられるのであります。

「念仏者は、無碍の一道なり」とは、ことばが少し足りないようであります。しかしその真実は、

(一)「念仏は無碍の一道なり。」というところであり、また「者」の字を重く見て言え

ば、

(二)「念仏する者は、無碍の一道を生きるものなり。」とか、または

(三)「念仏者の道は無碍の一道なり。」

どちらにしても文字の末であつて、根本は、おのずから明らかであります。念仏者は、如来廻向の尽十方無碍の大道に立つて願往生するものであります。一切の有碍を転じて、無碍の一道を生活の上に顕現すること、これ念仏の一道であります。

## 邪説

しかるに、本章に対する見解について、ある地方、またはある人々は、これを解して、これはけつして行者の具体的な人牛生活において無碍であるのではない。われわれの生活はどどこまでも有碍である。念仏申しても有碍である。無碍と言われるのは、念仏のことであつて生活のことではないと、かかることを申すのであります。この説、あるいは、浄土往生は無碍に成就できるが、人生における念仏生活の上に無碍を認めないというのであります。ある人が、「念仏する者は、無碍の一道を生きさせていただく者であります。」と語るや、ある僧侶の評していわく「君はまだ、若い2若い。女房ができ、子供が生まれて、この世の辛苦が身にしてみれば、それは、わかることである。」と信仰生活の有碍を語りました。これはまさしく聖人の真意を解せざる邪説の一種であります。

もちろん、人生は徹頭徹尾有碍そのものであります。逆境が有碍そのものであるばかりでなく、順境もまた有碍であります。順境は水の河、逆境は火の河と譬えられるがごとく、水火二河、貪瞋順逆の二境はともに有碍そのものであります。しかるに凡夫は、貪欲の満足される順境は、これを有碍とは考えないのであります。今の邪説のごときも、女房や子供のいない係累の少い日のごときは有碍ではないと考えているのであります。念仏生活が無碍の一道だなどと言うのは、人間苦を知らない時のことであると言うのは、汝の無碍道というのは、順境のことであるという、自己決定が入っています。

もし人あつて、念仏をもつて順境に処し、愚かにも順境を念仏と結んで、無碍の一道だと考えているならば、それはまことに大変な間違いであります。逆境が有碍を有碍と知られる日であるならば、順境は、無碍と間違えられやすい、あるいは無意識に無碍として受け取られる有碍であります。海の荒れる日に大洋を泳いで渡ることはもちろんできないが、なぎの日であつてもこれを渡ることはできないがごとく、順逆ともに有碍であることは、同一であります。それであるのに、順境を無碍と思ひ、逆境のみを有碍と感ずるがごときは、そもそも間違ひの根本であります。本章をいただ

くについても、このことが混同されているかぎり、その真意を知ることができないで  
ありましよう。

## 念仏の上に

「念仏者は無碍の一道なり。」

「念仏者は」のおことばに注意すべきであります。また次の節には、「そのいはれい  
かんとならば、信心の行者には」とあります。まさしく、信心の行者は、無碍の一道  
を生きさせていただくものであります。

念仏の行者は、無碍道を生きると言っても、人生そのものが無碍の境だと言うので  
はない。もし人生そのものの有碍がおこらないで皆無となると言うならば、念仏の無  
碍ということも意味はなくなるであります。人生の有碍を有碍と感ずる、恵まれ  
た順境さえも、仏道を成じ涅槃の彼岸に至るためには、有碍そのものであることは、  
むしろ念仏する人にして、はじめて真に知ることでありましよう。念仏せぬ日の有碍  
は、外にのみあります。念仏する日のそれは、外はもちろんのこと内にこそありま  
す。しかも、有碍なるべきに、その貪瞋二河中に、念仏の清浄の願往生心を廻向して、  
無碍の白道たらしめたもうことを信知することであります。

心を静めてよく頂かねばなりません。ここに無碍とは、道において無碍のことであ  
ります。貪欲の思うがままになることにおいて、無碍であるのではないのでありま  
す。如来本願の絶対必然の業力によるがゆえに、絶対道義の成立において、またその  
無上道を生かさせていただくことにおいて無碍なのであります。邪説のごときは、無<sub>3</sub>  
碍とは順境にして意のままに恵まれるがごときこととしてるのであります。

ここに無碍とは、人格成就の根本、道義不退の大慶喜、往生成仏の一道において無  
碍であると仰せられるのであります。行者誤つて、無碍の一道を邪に解釈してはなり  
ません。幾万トンの大船は、大小の波はあつても大海を渡ることにおいて無碍であ  
ります。無碍は船の上に語るべく、波の中にあるのではありません。

## 一無碍道

無碍の一道なる言は、もと華嚴経に出てくるものであり、それを曇鸞大師が論註に  
用いられたのであります。その論註の文を、聖人は行巻の他力論を示される処に引用  
されました。いわく、

『菩薩は是の如く五門の行を修して自利利他して速に阿耨多羅三藐三菩提を成就す  
ることを得たまへるが故に』といへり。仏の得るところの法を名けて阿耨多羅三藐  
三菩提と為す。此の菩提を得るを以ての故に名けて仏と為す。』

と示した後、この阿耨多羅三藐三菩提を訳して無上正徧道となすことを示して、その  
無上正徧道の道について、

「道とは無碍道なり。經(華嚴経)に言く『十方の無碍人、一道より生死を出づ』と。  
一道とは一無碍道なり。無碍とは、謂く生死すなわち是れ涅槃なりと知るなり。是  
の如き等の入不二の法門は、無碍の相なり。』

と釈せられました。これによりますと、仏の得るところの菩提、すなわち無上道とは一無碍道とよばれるものであり、その一無碍道とは、生死即涅槃という、すなわち仏の絶対智、すなわち般若の根本智のことでもあります。これ、法蔵菩薩が、五念門によつて成就せられたものであります。言い換えると、南無阿弥陀仏の上にこそ、この無碍道たる、生死即涅槃、煩惱即菩提の法門は、具体的に成就されているのであります。でありますから、生死即涅槃という不二法門は、名号の徳義を示されたものであります。

聖道門の人は、われと自らの力量によつてこの絶対智見を成就して、生死煩惱を涅槃菩提の功徳に転じようとし、浄土門の人は、名号の功徳によつてこの大用を受け取るのであります。

曇鸞和讃には、

「無碍光の利益より 威徳広大の信を得て

かならず煩惱のこほりとけ すなはち菩提のみづとなる。

罪障功徳の体となる こほりとみづのごとくにて

こほりおほきにみづおほし さはりおほきに徳おほし。

名号不思議の海水は 逆謗の屍骸もとどまらず

衆悪の万川帰しぬれば 功徳のうしほに一味なり。

尽十方無碍光の 大悲大願の海水に

煩惱の衆流帰しぬれば 智慧のうしほに一味なり。」

などとお示しなされたのは、みな名号の中に摂在する生死即涅槃、煩惱即菩提、すなわち不二法門の徳義を示されたものであります。

天親論主は、弥陀の名号を、帰命尽十方無碍光如来と讃えられました。これまことに、大経の宗教を体解して得られた、大経の宗教の全体であるとともに、名号の実義を示すに最もふさわしい名号であります。

『一念多念証文』には、

「今一乗と申すは本願なり。円融と申すはよろづの功徳善根みちみちて闕かくることなし、自在なる意なり。無碍と申すは煩惱悪業にさへられず破れぬをいふなり。真実功徳と申すは名号なり。」と讃えられました。

また『唯信鈔文意』には、

「無明の闇をはらひ、悪業にさへられず、この故に無碍光と申すなり。無碍は有情の悪業煩惱にさへられずとなり。」

と仰せられました。そして信巻の信樂釈には、

「次に信樂と言ふは、則ち是れ如来の満足、大悲、円融、無碍の信心海なり。」

と釈してくださいました。真実功徳、すなわち「よろづの功徳善根みちみちて闕かくることなし」これが円融の円を示されたもので、これを「満足」と言われるのであります。「自在なる意なり」これが円融の融の徳であります。この円融の徳用によつて「煩惱悪業にさへられず破れぬ」を無碍と仰せられるのであります。煩惱悪業にさへられず破れぬは、それは、名号の功徳が、悪業煩惱を円融するからであります。円融するとは融かすことでもあります。融かして悪業煩惱を功徳に転じ変え成すことでもあります。

す。水多きに水多し、障り多きに徳多し。前の和讃の意頂くべきであります。不断煩惱得涅槃とは、まことに、不二法門が名号の徳義として、衆生の悪業煩惱を、衆生はわれと断ぜざれども、如来の功德宝海、名号の功德によつて断じてこれを転悪成徳してくださいる無碍の大作を示してくださいるみ言であります。これみな一実真如の妙理円満せるがゆえであります。大涅槃の徳そのまま、無量寿、無量光と顕われたまえる名号なるがゆえであります。

如来より衆生へ

以上によつて知らるるがごとく、名号法体の徳義を無碍道と言われたのであります。しかるに、今は「念仏者は無碍の一道なり」と、これを行者の信徳として讃えられたのであります。これしかしながら、第十八願の世界の内的風光であります。十八願の至心信樂之願の世界では、本仏の功德はそのまま行者の功德であり、行者の上に開けたる世界は、兔の毛羊の毛ほども行者自力のものでなくて、そのすべてが本願の廻向であります。かくのごとく、仏凡一体、機法一体の世界こそ、十八願の世界であります。したがつて、本仏の無碍は、行者の無碍であります。光明の無碍は、信心の無碍であります。でありますから、信巻に、

「次言信樂者、則是如来満足大悲円融無碍信心海。」

(次に信樂と言うは、則ち是れ如来の満足大悲円融無碍の信心海なり。)

と仰せられるのであります。信心海と言われるかぎり、行者の上に廻向顕現せられたる広大なる「海」のごとき信心の世界ではあります。この心広大なること、法界に周遍し、この心長遠なること尽未来際をつくし、この心よく無始生死の有輪を傾けるがゆえに、広大なること海のごとしと讃えられるのであります。しかし、それはけつして行者の自力によるものにあらざるがゆえに、

「如来満足大悲円融無碍信心海」

(如来の満足大悲円融無碍の信心海なり)

と釈せられるのであります。如来とは人であり、満足以下の十一文字は法であります。人法不二。まつたく弥陀と号するはこの十一文字があるがゆえであり、また、この十一文字の示す法徳は弥陀よりほかにこれを探ねてもないのであります。本願名号よりほか、どこにもこの十一文字を見出すことはできません。衆生の上に開闡せられる信心でありつつ、そのまま人法不二の弥陀の法徳であること知るべきであります。

名号が尽十方無碍光の徳義を有するがゆえに、威徳広大の信を獲れば、信また無碍でありますから、「円融無碍の信心海」であります。信心は、衆生の心相であります。行者の自覚自証の境であります。行者の精神生活の領域であります。本仏の上に成就されたる無碍は、今かくして行者の生活内容となつてくださるのであります。本願名号が、尽十方無碍であるがゆえに、その廻向顕現たる信心海もまた無碍であります。まことに、念仏者は、無碍道を獲得せるものであります。念仏の行者は無碍であります。信心の行者は無碍であります。如来本願によるがゆえであります。

## 第二節 無碍の謂

「そのいはれいかんとならば、信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。罪惡も業報を感ずることあたはず諸善もおよぶことなきゆゑなりと云々。」

「念仏者は無碍の一道なり。」

人生は有碍であり、如来は無碍であります。しかるに、如来は、名号を廻向することによつて有碍のこの世に無碍道を顕現してくださるのであります。「満足大悲円融無碍信心海」は如来法体の徳であるまが、そのまま衆生の信心海でありました。この生仏不二の信心海こそ、十八願の世界の内的風光であります。これ如来正覚の全体が衆生往生の全体であり、衆生往生の全体が、正覚の全体として名号が成就せられてあるがゆゑであります。

今この第二節においては、念仏者が無碍であるその謂れを示されるのであります。この節を伺いますと、「そのいはれいかんとならば、信心の行者には」と信心の行者を中心として、そこに四つのものが示されてあります。すなわち、(一)天神地祇と、(二)魔界外道と、(三)罪惡業報と、(四)諸善とであります。今これを表示しますと、

信心の行者には	天神地祇	敬伏	善	外	無碍の一道
	魔界外道	不障碍	惡	外	
	罪惡業報	不感	惡	内	
	諸善万行	無及	善	内	

以上のごとく、天神地祇は善、魔界外道は惡、この外の善も惡も、そして後の二つは、内におこる惡と善、その内なる善惡も、ついに、念仏行者において障碍となることはできないのであります。

神祇敬伏

ト

現世利益和讃を頂きますと、

「南無阿弥陀仏をとなふれば 梵王帝釈帰敬す

諸天善神ことごとく よるひるつねにまもるなり。

南無阿弥陀仏をとなふれば 四天大王もろともに

よるひるつねにまもりつつ よろづの惡鬼を近づけず。

南無阿弥陀仏をとなふれば 堅牢地祇は尊敬す

かげとかたちとの如くにて よるひる常にまもるなり。

南無阿弥陀仏をとなふれば 難陀跋難大龍等

無量の龍神尊敬し よるひるつねにまもるなり

南無阿弥陀仏をとなふれば 他化天の大魔王

釈迦牟尼仏のみまへにて まもらんとこそちかひしか。

天神地祇はことごとく 善鬼神となづけたり

これらの善神みなともに 念仏のひとをまもるなり。」

この和讃は、天神地祇が念仏の人を尊敬することを示されたものであります。梵天王や帝釈天は四天王とともに、仏法守護の神々であります。これらの神々は、世尊が印度にお出ましなさるまでに、すでに印度でそれぞれ思想や信仰の対象になっていたところの、天上界の神々であります。それらのすべてが、みな仏法守護の神々となつたのであります。奈良の大仏とか、京都の三十三間堂とか、そうしたところの仏像の四周には、広目天、多聞天等の四天王の像があります。これは、仏法守護のために四方を守っている相を出したのであります。しかるに、今、和讃には「南無阿彌陀仏をとなふれば 四天王もろともに よるひるつねにまもりつつ よろづの悪鬼を近けず」とあります。四天王が念仏の人を守る、意味深いことでもあります。

また念仏の人を「堅牢地祇は尊敬す かげとかたちとの如くにて よるひる常にまもるなり」とあります。『金光明経』には、堅牢地祇品というのがありますが、この地の神は、大地の底にいる女神であります。五穀がみのるとか、花が吹くとか、葉草ができるとか、みなこの女神の力だとされます。この女神が精力を得れば、女神の業も栄えるわけであります。しかるにこの女神は、正法の説かれる時は、その正法を説く人も、その会座も、その掌の上にささえて、自らその説法を聞き、それによつて自らも精力を得るといふのであります。

子どもの頃、親不孝ものがいると、この大地の神様は頭が痛いので、頭を振るため地震がおこるのだと聞いたことがあります。意味深い寓言であります。この女神は、たとい須弥山を頭にのせても重いとは思わぬが、正法に反逆する無道の者を頭にのせていることは、堪えられないことだそうであります。人の心が荒れてくると山野が荒れてきます。荒れた山野には地の神を祭り、それに功利的な祈りをして、地神はますます痩せるのみであります。正法と大地、念仏と大地、考えさせられることではあります。人間は自然に反抗して生きるものではありませんが、しかし、反抗ばかりで生活は成就しないであります。

あの世にあつて罪を裁くと言われる閻魔法王も、五道の冥官も、念仏の人を守護します。司法官や警察官が、恐いものであるか、ありがたいものであるかは、その人の生活による。念仏の人は、永遠の大道を生きさせていただくものであります。ありがたいことでもあります。無碍の一道の味わわれることでもあります。

第六他化天の大魔王は、もと、世尊の成道を妨げようとした、いわゆる天魔破旬であります。しかるに「魔王懺愧、捨離憍慢」と世尊の大悲に摂取され、その前にひれ伏しました。化土巻には、日藏経、月藏経などを引用せられてあります。

「時に魔破旬、其の眷属八十億衆の与に、前後に圍繞せられて仏所に往至す。到り已りて世尊を接足頂礼したてまつり、是の如きの偈を説かく。乃至、三世諸仏の大慈悲、我が一切の殃を礼懺するを受けたまへ、法僧二宝もまたまたしかなり。」

と三宝に帰することを示され、また『大集経』を引いては、これらの天神たちが、「護持の故に、養育の故に、衆生を憐愍するが故に、三宝種をして断絶せざらしめんが故に、熾然ならしめんが故に、地の精氣（五穀のこと）、衆生の精氣（聞法の福

力)、正法の精気(三宝のこと)、久しく住して増長せしめんが故に、諸の衆生をして三悪道を休息せしめんが故に。」

などと諸天善神の使命が示されてあります。大魔王が、私のための力になるか、妨げとなるかは、正法の有無によるのであります。念仏の人は、この大魔王にまで守られるとは、驚くべき道義の権威を示されたものであります。

「天神地祇はことごとく、善鬼神となづけたり、これらの善神みなともに、念仏のひとをまもるなり。」

神々は、祈願すればその欲するところを与えるものではなくて、道を生きるものを守護するのであります。本質的に道に更生することを忘れて、功利的な祈願に狂奔するものは哀れであります。今このみ教え、頂くべきことであります。民間信仰の対象たる一切の神々、それをもすべてとり入れて、しかもそれを超えて、その尊敬を得るところに、念仏者の無碍道は展開することを示されたのであります。

## 魔界外道

「念仏者は無碍の一道なり。」

天神地祇は、われらの客観、すなわち外に現れて来る善神であります。この善神は、これに祈願したり、お願いしたりすればご利益を与えてくれるものではなくて、真実に生きる者に敬伏して、それを守護するのであります。

次に出て来るのは、善に対して悪、外から来る悪、すなわち魔界外道が、念仏者を障碍することのできぬことを示されるのであります。

魔については、四魔が説かれます。天魔、煩惱魔、五陰魔、死魔ごおんがそれであります。第一はいわゆる外魔で、他の三は内魔であります。煩惱魔は生死の因、陰魔、死魔は生死の果であります。貪欲瞋恚等の煩惱は、よく善法を害するがゆえに魔であります。色、受、想、行、識の五陰身は、生死の身であつて、この色心による無常汚悪の身あるがゆえに、やがて死魔にのまれるのであります。死魔こそはよく命根を破壊するものであります。しかるにこの二魔は、常住法身を得ることによつてこれを降伏することができるのであります。

今ここに魔界とあるのは、外魔のこと、すなわち、いわゆる天魔と言われるものであります。世尊の成道の時、その正覚の座に現われ来つて、正覚を妨げるところの、第六天の大魔王、他化自在天の魔王、波旬がその八万四千の眷属をつれて、正覚の邪魔をする。初めは三人の女が出て来て世尊を誘い、その動き給わぬを見るや、つぎつぎに眷属をくり出して、ものすごい光景が現れ、ついに、魔王自らが正体を現して、毒矢を擬して世尊に向かい、もとの苦行林に帰つてわれのための幸福を求めるか、あるいは王宮に帰つて人間の享樂を求むるか、それが聞かれないならば、その毒矢をもつて死に至らしめるとおどし、動きたまわぬを知るや、ついにそれを射るけれども、世尊の眼中にはない、かえつてそれが、天蓋と化して世尊の頭の上にとまつて莊嚴となるのであります。悪魔は正体を出さぬものであります。世尊の正覚の近づきにつれて、悪魔はいよいよその正体を暴露してきはじめ、ついにその魔王が現れてきたことは感銘深きことであります。悪魔がその正体を現すのは、智慧の光に照らされ



るからでありましょう。さればこそ、世尊が正覚の座におつきになると、悪魔の宮殿は震動します。

しかるに悪魔はついに世尊の大慈悲力の前には、もろくも降伏するのであります。「魔王 懺愧 捨離憍慢」(因果経)と仏の十力威徳の光には、いかんともできないのであります。この天魔こそは、まことに生死流転の縁であります。智慧力も慈悲力もない凡夫は、常に、この外魔のために、自行を妨げられ、化他を障えられて、自損損他の世界に流転せるものであります。

次に外道とは、仏道ならぬ教えのことでありますが、印度においては、いわゆる六師外道およびその弟子で、九十五種の外道であります。これらはみな、われの幸福を根底とするもので、因果を撥無して信ぜず、あるいは宿世の業因を説いて現世の精進を認めないとか、人の真実自覚を妨げる思想のことです。聖人は本典信巻末に、

「偽と言ふは、即ち六十二見、九十五種の邪道是れなり。涅槃経に言はく、世尊常に説きたまはく、一切外学の九十五種は、皆悪趣に趣くと。光明師(善導・法事讃)の云く、九十五種皆世を汙す。唯信の一道のみ独り清閑なりと。」

まことに「九十五種世をけがす。唯信一道きよくまします。」外道こそは、衆生を偽の世界に、苦悩の境に、穢悪の闇につれ込むものであります。

#### 無障碍

「念仏者は無碍の一道なり。そのいはれいかんとならば、信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。」

世尊の成道を妨げ得なかつた魔界は、念仏の行者をもまた障碍することはできないのであります。これ念仏の行者は、仏智を獲るがゆえであります。

「智慧の念仏うることは 法蔵願力のなせるなり

信心の智慧なかりせば いかでか涅槃をさとらまし。」

仏智そのままの大信心なるがゆえに、信心は仏智であります。仏智とは、尽十方無碍の光明智慧であります。

信心の行者は、仏智の光明によつて、わが心内に巢食う悪魔煩惱を対治せられるものであります。廻心懺悔して仏智光明に摂取不捨せられたものであります。み法に帰依して己に依らぬものであります。我が打ち砕かれて無我の心に住するものであります。心眼を開かれて、何が尊くて、何が尊くないか、何が真実で何が虚偽であるかを知った人であります。真如一実の広大なる功德宝海を身に獲た人であります。したがって内に満足慶喜せるものであります。こうした一切は、如来廻向の徳として、悪魔外道をして便りあらしめないものであります。魔界外道はただ、内なる因に相應して外に現れてわれらを悩ますのであります。

善導大師が二河白道の譬えにおいて、白道上の行者を表わして、

「或は行くこと二分二分するに、東の岸の群賊等喚うて言く、仁者回り来れ、此の道險悪にして過ぐることを得じ、必ず死せんこと疑はず、われら衆て悪心ありて相向

ふことなしと。此の人喚ぶ声を聞くと雖も亦回顧せず、一心に直に進んで道を念じて行く。」

とお示しくくださったことは、まことに注意すべきことであります。白道に立った時にはじめて、異学異見別解別行悪見人等一切の群賊外道の声は聞こえてくることであります。巷ちまたに満つる喧騒なる八万四千の声は、外道でなければ悪魔、虚偽でなければ権仮、われらをよびかえそうとするのであります。真実が真実と知れないで、外道群賊の虚偽が虚偽と知れるものではありません。

仏教（釈迦）に随順し、仏願（弥陀）に随順し、仏語（諸仏）に随順して、成ずるものすなわち、大信心であります。なんで無明煩惱の雑音、魔界外道の声に対して便りを得させましょう。魔界外道が障碍し得ないのは摂取不捨のゆえであります。信心の智慧のゆえであります。自覚のゆえであります。一筋に如来真実の教命に生きるがゆえであります。如来真実金剛不壞の白道に立つてのみ、魔界外道を超えることができるのであります。外の虚偽は、内の真実によつてのみ超えることができるのであります。

### 罪悪業報

外の障碍がすみまして、次は内の障碍であります。

「念仏者は無碍の一道なり。そのいはれいかんとならば、信心の行者には、…：罪悪も業報を感ずることあたはず、諸善もおよぶことなきゆゑなり。」

衆生海は罪悪に満ちたものであります。罪とは、誹謗正法とて、正法に限りなき反逆をしていふことであります。これを大経には本罪とあります。この仏智疑惑の本罪から、無限の悪が生まれてきます。十悪五逆の一切の悪は、この本罪の無明から生まれることであります。しかし、一切の善にもせよ悪にもせよ、法界一切の事は、因縁、因果の軌道によつて動いているものであります。この因縁果の動きを業と言うのであります。

大願業力とて、如来の大慈悲も業力でありますが、ここに業報と言われるのは、衆生の悪業のことであります。「罪悪も、業報を」とあるのは、同一のものからあります。根本無明すなわち惑から業が生まれ、業から苦が生まれます。悪業から苦の報いを受けるがゆえに業報と言われるのであります。罪悪の業から生死の苦が生まれます。これを罪悪生死と言う場合もあります。まことに衆生は、惑業苦と、罪悪生死を三世に繰返しているものであります。造つた罪悪から業報を受ける、これが法界の識別であります。

### 横超

しかるに信心の行者には、「罪悪も業報を感ずること能はず」と言われます。これをいかに領解すべきでありましょうか。

善導大師は、如来本願の救いを顕わして、「横超断四流」とお示しく下さいました。横超というのは、

「横はよこさまといふ。よこさまといふは如来の願力を信ずるゆえに、行者のはからひに非ず。五悪趣を自然にたちすて四生をはなるるを横といふ。他力と申すなり。これを横超といふなり。」(『尊号真像銘文』)

とあります。横は他力、超はすみやかに生死を越えることでもあります。

化土巻には「横超とは、本願を憶念して自力之心を離る。是れを横超他力と名くるなり。」と説かれました。また信巻には「大願清浄の報土には、品位階次を言はず、一念須臾の頃、速に疾く無上正真道を超証す。故に横超と曰ふなり。」とお説きになりました。化土巻の御文は、信の横超、信巻の御文は証果の横超を示されたのであります。

次に断四流ということについて信巻には、

「断と言ふは、往相の一心を發起するが故に、生として当に受くべき生無く、趣として更<sup>また</sup>到るべき趣無し。已に六趣四生の因亡じ果滅するが故に、すなわち頓<sup>とみ</sup>に三有の生死を断絶す。故に断と言ふなり。四流とは、則ち四暴流なり、又生老病死なり。」と説かれました。つまりこれは生死流転の業の流れを断ちきつてくださることでもあります。信の一念に仏智疑惑の本罪を滅ぼしてくださるがゆえに、断といふのであります。「已に六趣四生の因亡じ果滅するが故に」断と言われるのであります。迷いの因も果も一念に滅びることでもあります。でありますから、信心の行者には、罪悪も業報を感ずること能わずと、示されるのであります。

「されば無始已来造りと造る悪業煩惱を残る所もなく願力不思議をもて消滅する謂あるがゆゑに、正定聚不退の位に住すと成り、これによりて煩惱を断ぜずして涅槃とを得といへるはこの意なり。」

と蓮如さまの御文章には示されてあります。

「消滅する謂」とは、きわめて含蓄のあるおことばであります。何ゆゑに消滅する謂と言われるのでありましょうか。消滅とは、普通には、消えで無くなることだと考えます。罪業が滅するとは、罪業がなくなることに、しかしそれは小乗の考え方でありまして、大乘の考え方ではありません。大乘の考え方では、この世には無くなるものはない。たとえば、氷が無くなった、米が無くなったと言つても、無くなつたのではない。それは転じたのであります。そこで、『唯信抄文意』には、

「自然といふはしからしむといふ。しからしむといふは、行者のはじめてともかくも計らはざるに、過去今生未来の一切の罪を善に転じかへなすといふなり。転ずといふは、罪を消し失はずして善になすなり。よろづの水大海に入ればすなわち潮となるが如し。弥陀の願力を信ずるが故に、如来の功德を得しむるが故にしからしむといふ。」

と説かれます。これ消滅する謂であります。「如来の願力を信ずるが故に、如来の功德を得しむるが故に」罪を消し失わずして、善に転じかえ成す、この転悪成善のことを消滅と言うのであります。三世の罪業が一念の信によつて断じたもうて、不断煩惱得涅槃と、横超の証果を得させてくださるのであります。

超えることについて

如来の本願力は、無量の功德を廻向してくださる。そして三世の罪業を消滅してくださる。しかしそれが無くなることであるならば、如来の本願も、火薬の爆発するがごとくにおわるでありましょう。念仏生活において、「罪悪も業報を感ずることあたはず」ということは出てこないことであります。しかるに実際には、臨終まで悪業煩惱、水火二河の無くならない凡夫であります。ここにも「消滅する謂」のおことばが響いてきます。如来の願力は「この婆娑生死の五蘊所成の肉身未だやぶれずといへども生死流転の本源をつなぐ自力の迷情共発金剛心の一念にやぶれて」と、三世の業障を摧破してくださるのでありますが、生死界の約束として、大木を切り倒しても、まだ生きております。釜の下から火は引いても湯は煮えています。風はやんでも波は打っています。これがすなわち、習気じゅうけであります。この肉身のあるかぎり、依然として煩惱が波打っています。そこに、この煩惱の上に輝きたもう仏心、仏心によつて輝かしめられる煩惱の具体的な念仏生活があるのであります。そして、この因位の世界のありさまを、無碍の一道と言ひ、「感ずることあたはず」と仰せられたのであります。

この世にあるかぎり、煩惱を無くしてしまおうとしたり、無くなつたと思つたりすることは、大変な間違いであります。いな、むしろ念仏の行者は、如来の智慧光に照らされるようになってから、罪障の底なきを知らしていただくことであります。これ無限の生死界を、自己において見るがゆえであります。信心の智慧によつて機の真相を凝視する。自己の真相を内観することによつて自力をすてて他力に帰するのであります。我慢を我慢と知らず、邪見を邪見と知らずして、邪見我慢を超えることはできません。超えることができないでは、無碍の一道は現れてはこない。本願の白道に乗托してのみ水火二河は現れてき、現れてくるがゆえに、顧みずといわれる世界が開いてくるのであります。内と外とに何が起ころうと、念仏一道に生ききらしていただくべきであります。そこに「罪悪も業報を感ずること能はず」との仰せが、ほのかに領解できることでありましょう。

### 諸善無及

「念仏者は、無碍の一道なり。」

念仏行者には、外に、天神地祇の敬伏と魔界外道の不障碍を成し、内に、罪悪業報の不感の徳あることを頂いてきました。

「罪悪も業報を感ずることあたはず、諸善もおよぶことなきゆゑなりと云々。」

次に第四の謂れが、「諸善もおよぶことなき」ことであります。いかなる善も念仏には及ばぬことを示されるのであります。これはいかなるわけでありましょうか。

### 真如一実の功德宝海

何ゆえに、諸善も及ばないのであろうか。それは、信心の行者は、如来の名号、すなわち大行の行者だからであります。和讃に聖人の言わく

「五濁悪世の有情の 選択本願信ずれば

不可称不可説不可思議の 功德は行者の身にみたり。」

本願の名号を信ずるものは、不可称不可説不可思議の功德、すなわち、称量すべき秤がなく、説くべき言説なく、人間の思い議はからいを超えたる絶対の功德の持主となることを仰せられたのであります。

何ゆえに名号は、不可称不可説不可思議の功德であろう。  
行巻には、

「謹んで往相の廻向を按ずるに、大行有り、大信有り。大行とは則ち無碍光如来の名を称するなり。斯の行は、即ち是れ、諸の善法を撰し、諸の徳本を具せり。極速円満す。真如一実の功德宝海なり。故に大行と名く。」

名号は、真如一実の功德宝海であります。名号が諸の善法を撰すとて、恒沙の功德を満足しているのは、真如法性そのままが顕現した一実の功德、絶対の一、無限絶対の功德、一如の絶対価値そのままの大宝海だからであります。極速円満す。一念にこの功德を行者的上に廻向せられて円満満足するのであります。行巻には、念仏の教と機の絶対不二を明かされた後に、

「敬うて一切往生人等に白さく、弘誓一乗海は、無碍無辺最勝深妙不可説不可称不可思議の至徳を成就したまへり。」

と讃えられました。それから次に誓願の不可思議を讃嘆されるにあたって、二十八句の譬えによつて示されましたが、その第一の総嘆において、

「悲願は喩へば、大虚空の如し。諸の妙功德広無辺なるが故に。」

と示し、やがて大地の如し、大水の如し、大火の如し、大風の如し、と讃嘆せられます。本願名号の広大なることを嘆ずるに、ありとあらゆる尊き文字をことごとく集めてもまだ足りないかの風情であります。

聖人には、本願の名号より尊きものはなかつた。『大無量寿経』において真実の教はなかつた。浄土真実の教行信証こそは、円融満足極速無碍絶対不二の一乗海であります。大信心とはまことにこの真如一実の大功德を受け取った心、これにむかつて開かれた智慧であります。心の眼であります。久遠劫来の盲が開眼の手術によつて、ほのかに、心霊の黎明に立つて、明かに見えそめた法界の真実相であります。久遠の太陽、尽十方無碍光如来が衆生の自力憍慢を滅ぼして、その本願が衆生の大主観に顕現した大信心、それが流出したお念仏、お念仏こそは、かくして、全一広大なる大善であります。

「諸善もおよぶことなきゆゑに」これ聖人の信心の智慧によつてなされた千古の断案であります。われらは、お念仏申させていただきつつ、年ふるままに、あらゆる意味から、このことの真実であることを知らせていただくことであります。

## 二種の功德

曇鸞大師は論註において、真実功德を解釈するにあたって

「真実功德相とは、二種の功德有り、一には、有漏心よ従り生じて法性に順ぜず、いわゆる凡夫人天の諸善、人天の果報、若くは因、若くは果、皆是れ顛倒す、皆是れ虚偽なり、是の故に不実の功德と名く。二は、菩薩の智慧清浄の業より起りて、仏事を莊嚴し、法性に依りて清浄の相に入る。是の法顛倒せず、虚偽ならず、真実功

徳と名く。云何が顛倒せざる、法性に依りて二諦たたいに順ずるが故に、云何が虚偽ならざる、衆生を撰して畢竟浄に入らしむるが故なり。」とお説きになりました。

これ、諸善と念仏との二種の功德の相違を示されたのであります。「凡夫人天の諸善」は、顛倒不浄であり、虚偽不実であります。名号は法性によりて真俗二諦に随順するがゆえに、不顛倒清浄であり、衆生を撰取して、ともに涅槃の清浄なる証果に入らしむるがゆえに、不虚偽真実功德であります。しかるに凡夫人天の諸善は、有漏心、すなわち煩惱より出たもので、法性真如に順わず、善の相をしているようでも、つきつめて考えた時、みな無明煩惱より出たもので、真実に自利成就することができず、それゆえに利他成就することもできません。それでありますから、顛倒と言われ、虚偽とよばれるのであります。本願の名号そのままのお念仏こそは、まことに、不顛倒不虚偽の清浄真実であります。われらは仏智の光に照らされてのみ、このことを領解させていただくことができます。内観の世界においてこのことが知れます。

### 権仮と真実

しかるに、仏道中には、自ら法性真如に随順して開覚しようとする、いわゆる大乘の菩薩道がないことはありません。華天密禅等の大乘至極の法門においては、此土において入証果得せんとするものでありますが、これは、善導大師が『般舟讚』において仰せられるように、「一時に煩惱百たび千たび間まはる、若し娑婆にして法忍を証せんことを待たば、六道に恒沙の劫にも未だ期あらじ」でありまして、われとわれを救うて悟りを開くことのできない凡夫であります。ここにおいて、八万四千の法門は、われら凡夫の真相を写し出す鏡とはなれ、最後の真実ではなかつたのであります。これによつてわれらの真実を知らしめ、五濁の悪機をたたき出して、自力をすてしめ、本願の名号によつて救いたもうのであります。八万四千の法門は、たといそれがいかに深遠なものであろうとも、方便権仮の法門となるのであります。和讃にいわく、

「念仏成仏これ真宗 万行諸善これ仮門

権実真仮をわかずして 自然の浄土をえぞしらぬ。

聖道権仮の方便に 衆生久しくとどまりて

諸有に流転の身とぞなる 悲願の一乗帰命せよ。」

念仏の行者は、聖道自力の成じ難きを知るものであります。聖道自力を成ずることができないかぎり、下根の凡夫であります。しかしながら、唯一の本願真実に目覚めたるものであります。この悲願の一乗に帰するかぎり、等正覚の菩薩、正定聚不退の人と言われます。本願真実の一乗によつて無碍道を歩むものであります。まことに無碍の一道は、かくして己の真相を知り、如来久遠の真実に目覚めたる大信海の事実であります。誤つて煩惱の偽装によつて無碍道のごとく考え、あるいは煩惱の囚とらとなつて有碍に止まつてはなりません。無碍の大道は、ただ真実の念仏の上のみあります。体解すべきであります。無碍の道味は、大地に合掌して、本願真実の上のみ語らるべきであります。